

『情史』の編集方法 (1)

小松建男

1. 前 言

『情史』(24巻)は、「情」に関わる話約900条を、文言小説集や筆記小説の中から抜き出し、改作して、巻一「情貞類」(貞節を守った女性の話)、巻二「情縁類」(不思議な縁で結ばれを男女の話)のように内容によって24巻24類に分類配列した書物である。各類の中はさらに、たとえば、「情貞類」ならば、「夫婦節義」・「貞婦」・「貞妾」・「貞妓」、 「情縁類」ならば、「意外夫妻」・「老而娶者」・「妻自択夫」・「夫妻重逢」と内容により細分されている。各巻の終りには必ず編者による評語が、例えば、「情貞」では、

情主人曰：“自來忠孝節烈之事，從道理上做者必勉強，從至情上出者心真切。夫婦其最近者也。無情之夫，必不能爲義夫；無情之婦，必不能爲節婦。(後略)

のように付けられている。また個々の作品についても評語(内容は、評論、考証、類話など多様であるが、一応評語と総称することにする)が付けられていることがある。

編者と考えられている馮夢龍(1574~1646年)は、明代後期に通俗文学の世界で活躍した人物として知られ、特に彼自らが創作した作品も恐らく含むであろう、一般に『三言』(『古今小説』、『警世通言』、『醒世恒言』)と総称される、三冊の短編白話小説集の編者として有名である。

馮夢龍は、男女の関わり方の諸相を取り扱った『情史』を編纂したのみではなく、『三言』にも、やはり多くの男女の話を収録している。そもそも『情史』の刊行された前後の時期は、女性を主人公にした、または男女の恋愛を扱った小説・小説集が多数出版されている。このような当時流行の題材を、この時期の小説の作者・編集者中で最も生産的かつ著名であった馮夢龍が、どのような書物を読み、そこからどのような作品を選び出し改作して『情史』という書物に仕立てたかを明らかにする事は、明代後期の小説家の創作活動の実態を知ると言う意味で興味のある事柄であると言えよう。

本論では、このような関心から、『情史』と『情史』の刊行より前に出版されている書物の間に見られる共通する作品を比較することによって、馮がどのような書物を資料として利用し、どのように改作しているのか、という編集の方法を明らかにしてゆきたいと思う。

2. 馮夢龍の著作に重見する作品

この節では、馮が『情史』よりも以前に出版されていた書物を、どのように利用しているかについて、まず身近なところからはじめることとし、『情史』と他の馮夢龍の著作の間に重見する作品から見て行くことにしたい。

馮の編纂したもので、文言小説あるいは筆記小説に分類できるものとしては、『太平広記鈔』、『智囊』、『古今譚概』がある。はじめにこれらの書物の成立時代について見ておくと、『古今譚概』が一番早く、泰昌元年（1620年）以前に刊行されている¹⁾。また、『太平広記鈔』には、天啓6年（1626年）の、『智囊』には、天啓7年（1627年）の序が、それぞれついている。『智囊』は、刊年不明であるが、天啓6年（1626年）の序をもっている『情鐘』²⁾を書中に引用しているので、『情史』は天啓6年以後の刊行であることは間違いが無い。従って、『情史』は『太平広記鈔』や『智囊』と同時期か、もしくはこれより遅れて刊行されたものと考えられる。

『情史』とこれらの著作の間に重見する作品を比較してみると、本文が同じであるばかりでなく、作品の最後に付せられた評語も同一もしくは類似していることがある。

例えば、『情史』³⁾の「張綵」（巻17 p. 535）などのように評語の冒頭に「譚概評云」とあるものは、『古今譚概』にもほぼ同一の本文と評語を持つ作品があり、馮が『情史』を編纂するにあたり、自分が以前に編纂した『古今譚概』に収めた作品を、再利用したことがわかる⁴⁾。

また、『情史』には、「～曰」というように、評語の冒頭に評者の名を明記して引用することがあるが、その中には「子猶曰」ではじまる、馮夢龍自身が評者である評語も含まれている。この「～曰」で始まる評語は、他の書物からの引用で、「子猶曰」ではじまる評語の場合も、多くは馮の他の著作中からの引用であることを確認できる。

例えば、『情史』の「尾生」は『情史』と『古今譚概』⁵⁾の双方にある。両者の本文と評語の全文は各々以下のようになっている。

譚 尾生與女子期於梁，女子不來，水至不去，抱梁柱而死。

此萬世情痴之祖。

情 尾生與女子期於梁，女子不來，水至不去，抱梁柱而死。

子猶曰：“此萬世情痴之祖。”

これを見れば分かるように、両者の間の違いは、『古今譚概』の「尾生」の評語に、「子猶曰」が無いことのみである。

なお『古今譚概』では、「尾生」は独立した一話として扱われておらず、「荀奉倩」及び「陳體方」の話とあわせて、「愛痴」という題名で一つにまとめられている。一方『情史』では、この三話が巻7「情痴類」に各々独立した話として、但し大変近くに配列されている。両書の作品の対応は、以下のようになっている。

表1

『古今譚概』	『情史』
「愛痴」(第一話) 卷3 (p.90)	「尾生」 卷7 (p.188)
「愛痴」(第二話) 卷3 (p.90)	「荀奉倩」 卷7 (p.185)
「愛痴」(第三話) 卷3 (p.90)	「陳體方」 卷7 (p.186)

三話のうちの残り二話、「荀奉倩」及び「陳體方」の本文も、『情史』と『古今譚概』は全く同じ。「陳體方」の話は、楊循吉の『蘇談』の「黠妓賺詩」が出典⁹⁾であると思われる。短い話なので、対照のため『蘇談』⁹⁾、『古今譚概』、『情史』の順に全編を引用しておく。

蘇 老儒陳體方，以詩名。吳中有一妓黃秀雲，好詩，謬謂體方曰：“吾必嫁君。然君家貧如此。肯爲詩百首贈我，以爲聘資乎。”體方信之。爲賦至六十餘篇而沒。情致清婉，傳誦詩林。然是妓實黠慧，利於多得其詩而已。於體方無意也。方體方之爲詩時，人多笑其老耄被詒，而欣然每談於人，以爲奇遇焉。

譚 吳中陳體方，以詩名。有妓黃秀雲，性黠慧，喜詩，謬謂體方曰：“吾必嫁君。然君家貧。乞詩百首爲聘。”體方信之。苦吟至六十餘章神竭而沒。情致清婉，方苦吟時，人多笑其老耄被詒，而欣然每誇於人，以爲奇遇焉。

情 吳中陳體方，以詩名。有妓黃秀雲，性黠慧，喜詩，謬謂體方曰：“吾必嫁君。然君家貧。乞詩百首爲聘。”體方信之。苦吟至六十餘章神竭而沒。情致清婉，方苦吟時，人多笑其老耄被詒，而欣然每誇於人，以爲奇遇焉。

『古今譚概』と『情史』の「陳體方」は馮が自著に収めるにあたり本文を改

作したらしく、『蘇談』の「黠妓賺詩」と本文が異なる。その一番の違いは、「妓實黠慧，利於多得其詩而已。於體方無意也」という黄秀雲の本心を説明している文章を、前に移し「性黠慧」と簡略にしたこと。これを見ると、『情史』の「陳體方」は『古今譚概』を編集したときのものを利用して過ぎず、『情史』のために改作したものではないことがわかる。

『太平広記鈔』⁹⁾と『情史』の間にもこの「陳體方」と同じ扱いをされている作品がある。その一例として、「馮燕」を取り上げておく。

『情史』の「馮燕」は、『太平広記鈔』にも収められている。『太平広記鈔』の「馮燕」の評語は、「子猶曰」が無いことを除けば、『情史』の「馮燕」の評語と同じ。この『太平広記鈔』は、『太平広記』⁹⁾の改編本なので、本文については、『情史』、『太平広記鈔』、『太平広記』の三本を比較してみることにする。三本各々は「馮燕」を以下の表に示す巻に収録している。

表2

書名	作品名	巻数
『情史』	「馮燕」(「情馮」)	巻4 (p. 131)
『太平広記鈔』	「馮燕」(「鈔馮」)	巻28 (p. 711)
『太平広記』	「馮燕」(「太馮」)	巻195 (p. 1463)

また「鈔馮」は、原典である「太馮」の本文と較べると、簡略化されているのであるが、「情馮」は、「太馮」ではなく、「鈔馮」と同じである。例として、「馮燕」冒頭を「太馮」、「鈔馮」、「情馮」の順に対照して示しておく。

太 唐馮燕者，魏豪人，父祖無聞名。燕少以氣任俠，專爲擊毬鬪鷄戲。魏市有爭財毆者，燕聞之，搏殺不平。遂沈匿田間。

鈔 唐馮燕者，魏人，少任俠，擊球鬪鷄戲。魏市有爭財毆者，燕聞之，搏殺不平，匿田間。

情 唐馮燕者，魏人，少任俠，擊球鬪鷄戲。魏市有爭財毆者，燕聞之，搏殺不平，匿田間。

以上は、「子猶曰」を伴っている例であったが、『情史』の評語中には「子猶曰」という言葉がないものにも、『智囊』や『太平広記鈔』の評語を利用しているものがある。

例えば『情史』の「東御史妓，吳進士妓」(巻4 p. 107)のうち「吳進士妓」は、『智囊』の「吳生妓」(巻25 p. 509)と本文が同じ。そして『情史』と『智囊』¹⁰⁾の評語は以下のようになっている。

情 呉生從未出醜，此妓心術手段，俱勝汧國夫人十倍矣。惜乎其福之涼也。

智 呉生從未出醜，此妓勝汧國夫人多多矣。

『情史』は、『智囊』の評語の文章を、評語の文章の一部として取り込んでいるが、「子猶曰」ということばはない。

なお『情史』では、この「東御史妓，呉進士妓」のあとは、「婁江妓」，「沈少霞妾」と並んでいる。しかも二作品とも『智囊』に重見し，本文と評語が『智囊』と『情史』で同じである。このうち「婁江妓」と同じ話は、『智囊』の「孫太學妓」（巻25 p. 508）であるが、『智囊』では「孫太學妓」，「呉生妓」（『情史』の「呉進士妓」）と順序は逆になるものの、『智囊』と『情史』のどちらでも「呉進士妓」の隣りにある。

ところが『情史』では、この「東御史妓，呉進士妓」・「婁江妓」・「沈少霞妾」三作の間で評語の処理のし方が異なる。「呉進士妓」は既に見た。「婁江妓」の評語は『智囊』と同文で「子猶曰」をともない。「沈少霞妾」の評語は、やはり『智囊』と同文であるが、「子猶曰」が無い。この三作の評語の扱い方を見ても分かるように重見する作品の評語をどのように処理するかは、必ずしも一貫していない。

この外に、『太平広記鈔』の眉批を『情史』の評語に利用した例も有る。例として「地祇」と「唐暉」の二編を取り上げるが、あらかじめ『情史』・『太平広記鈔』・『太平広記』の三本各々が、この二編をどの巻に収録しているかを以下に示しておく。

表3

「地祇」

書名	作品名	巻数
『情史』	「地祇」（「情地」）	巻 19 (p. 591)
『太平広記鈔』	「地祇」（「鈔地」）	巻 52 (p. 1318)
『太平広記』	「廬佩」（「太地」）	巻 306 (p. 2425)

「唐暉」

書名	作品名	巻数
『情史』	「唐暉」（「情唐」）	巻 8 (p. 204)
『太平広記鈔』	「唐暉」（「鈔唐」）	巻 58 (p. 1480)
『太平広記』	「唐暉」（「太唐」）	巻 332 (p. 2635)

次に掲げる「情地」の評語は、「鈔地」の眉批（『太平広記鈔』p.1319）に全く同文のものがある。

我徳於我，即妖異可忘乎。又安知親父不爲狼，親子不爲虎也？

「太地」の本文と比較してみると、「鈔地」は、先に挙げた「馮燕」と同様本文を削除した箇所が有る。そして、「情地」は、「鈔地」と本文がほぼ同じである。これも、話の冒頭を例に挙げておく。

太 貞元末渭南縣丞廬佩，性篤孝。其母先病腰脚，至是病甚，不能下牀榻者累年。曉夜不堪痛楚。佩即棄官，奉母長安。寓於常樂里之別第。將欲竭産以求國醫王彦伯治之。

鈔 貞元末渭南縣丞廬佩，性篤孝。其母先病腰脚，至是病甚，不下榻者累年。曉夜不堪痛楚。佩即棄官，奉母長安。竭産求醫。

情 貞元末渭南縣丞廬佩，行九，性篤孝。其母先病腰脚，至是病甚，不下榻者累年。曉夜不堪痛楚。佩即棄官，奉母長安。竭産求醫。

「情地」の「行九」は、「太地」・「鈔地」の最後にある「廬佩，第九也」に対応するもの。「情地」はこの「廬佩，第九也」削っている。

「唐暉」でも、『太平広記鈔』の眉批（『太平広記鈔』p.1482）が『情史』の評語の一部に使用されている。まず「情唐」の評語を掲げておく。

據云“地下亦受歳。”則西施、洛妃輩，至唐時皆當數百歳老人。猶侈談幽遇，不足嘔耶。又云（後略）

この「據云“地下亦受歳。”」というのは、「唐暉」の本文中に「地下亦受歳」とあるのを指し、「則西施……不足嘔耶」が評者の意見。「鈔唐」を見ると、丁度この「地下受歳乎」という本文の箇所の眉批は、「情唐」の評語の前半と同じである（引用中の五文字分の□は、不明箇所）。

“地下亦受歳。”則西施、洛妃輩，至唐時皆當數百歳老人。猶侈談□□□□□耶。

本文の方に目を転じ、「鈔唐」と「情唐」の本文を「太唐」と比較してみると、その削除の仕方は、よく似ている。やはり、冒頭の部分を例に挙げておく。

太 唐暉者，晋昌人也。其姑適張恭，即安定張軌之後。隱居滑州衛南（中略）小女姑鐘念，習以詩禮，頗有令徳。開元中父亡，哀毀過禮。常慕之。及終制，乃娶焉。

鈔 唐暉者，晋昌人也。妻張氏，滑州隱士張恭之幼女，即姑所出，甚有令徳。

情 唐暉，晋昌人也。妻張氏，滑州隱士張恭之幼女，即姑所出，甚有令徳。

但し、「唐暉」は、「鈔唐」と「情唐」の間に文字に異同がある。そして、その時「鈔唐」は「太唐」と文字が同じであり、「情唐」は『古今説海』¹¹⁾の「唐暉」(説淵部26)と文字が同じである。該当する箇所を「太暉」、「鈔暉」、「情暉」及び『古今説海』の「唐暉」、あわせて四種の本文を対照させて挙げておく。

太 後數歳，方得歸衛南，追其陳迹，感而賦詩曰：“寢室長簾，妝樓泣鏡臺。獨悲桃李節，不共夜泉開。魂兮若有感，髣髴夢中來。

鈔 後數歳，方得歸衛南，追其陳迹，感而賦詩曰：“寢室長簾，妝樓泣鏡臺。獨悲桃李節，不共夜泉開。魂兮若有感，髣髴夢中來。

情 後數歳，方得歸渭南，追求陳迹，感而賦詩曰：“幽室長簾，妝樓泣鏡臺。獨悲桃李節，不共一時開。魂兮若有感，髣髴夢中來。

海 後數歳，方得歸渭南，追其陳迹，感而賦詩曰：“幽室長簾，妝樓泣鏡臺。獨悲桃李節，不共一時開。魂兮若有感，髣髴夢中來。

次ぎにとりあげる「干寶」も、評語は『太平広記鈔』と同じでありながら、本文は『情史』と『太平広記鈔』の間で異なっている。やはり『情史』・『太平広段鈔』・『太平広記』のどの巻に収められているかを先に示すと以下のようになる。

表4

書名	作品名	巻数
『情史』	「干寶」(「情干」)	巻 10 (p. 276)
『太平広記鈔』	「于寶家奴」(「鈔干」)	巻 61 (p. 1603)
『太平広記』	「于寶家奴」(「太干」)	巻 375 (p. 2985)

評語は、「情干」の評語が、「子猶曰」で始まっていることを除けば全く同じ。しかし本文は異なる。この作品は短いので、「鈔干」と「情干」の全文を掲げておく。そのかわり「太干」(出典は『五行記])の本文は、「鈔干」とほとんど変わらないので、省略する。

鈔 干寶，字令升。父瑩，爲丹陽丞。有寵婢，母甚妒之及瑩亡，葬之，遂生理婢於墓。于寶兄弟尚幼，不之審也。後十餘年，母喪開墓，而婢伏棺如生。載還，經日乃蘇。言：“其父恩情如舊，地中亦不覺爲惡。”既而嫁之，生子。

情 晋干瑩爲丹陽丞，有寵婢，妻甚妒之。及薨亡，葬之，遂生埋婢於墓。瑩子寶，兄弟尚幼，不知也。後十餘年，瑩妻死，開墓，而婢伏棺上如生。載還，經日乃蘇。言：“干郎飲食我，一如生前。地中亦不覺爲惡。”既而嫁之，生子，更活數年。

「情干」の「干郎飲食我，一如生前」，「更活數年」は，「太干」にも見えない語句。干寶の父の妾が生き返った話は、『太平広記』といささか本文が異なるものが、『搜神後記』¹³⁾(巻4 p.25「干寶父妾」)に見える。次に示すのはその全文である。

干寶，字令升。其先新蔡人。父瑩，有嬖妾。母至妒，寶父葬時，因生推婢著藏中。干寶兄弟年小，不之審也。經十年，而母喪，開墓，見其妾伏棺上。衣服如生。就視猶煖，漸漸有氣息。與還家，終日而蘇。云：“寶父常致飲食，與之寢接，恩情如生。”家中吉凶，輒語之，校之悉驗。平復數年後方卒。寶兄嘗病氣絕，積日不冷。後遂寤，云見天地間鬼神事，如夢覺，不自知死。

これを見ると「情干」は、全体としてみれば、『搜神後記』の本文よりも「太干」の本文に近い。しかし、『搜神後記』には、上記の語句に対応しそうな語句、「寶父常致飲」及び「平復數年後方卒」があり、「情干」は、この『搜神後記』の語句を参考として、台詞を書き換えたものと思われる。「唐暉」や「干寶」のように、評語は踏襲しているにもかかわらず、本文には異なるものもあることを見れば、『情史』が馮の他の著作中の作品を無批判に踏襲しているのではないということが分かる。

以上『情史』を中心として、馮の著作の間に重見する作品を見てきたが、馮の他の著作と同じ評語や本文を使用していると言う現象は、『情史』のみに見られるものであろうか。試みに『智囊』の場合はどうか見てみることにしたい。

『智囊』巻25を例にとると、『太平広記鈔』と重見している作品として、「柳氏婢」、「崔敬女，絡秀」のうち「崔敬女」の話、「李奮母」、「董氏」の四編が見つかる。

まず、この四編が『太平広記鈔』と『太平広記』の何巻に収められているか、巻数と頁数を対照させておくことと次頁の如くである。

表5

作品	『智囊』	『太平広記鈔』	『太平広記』
柳氏婢	巻 25 (p. 507)	巻 45 (p. 1127)	巻 261 (p. 2039)
崔敬女	巻 25 (p. 507)	巻 44 (p. 1089)	巻 271 (p. 2128)
李畬母	巻 25 (p. 509)	巻 44 (p. 1090)	巻 271 (p. 2128)
董氏	巻 25 (p. 513)	巻 44 (p. 1089)	巻 271 (p. 2127)

このうち「李畬母」と「董氏」は、『太平広記鈔』・『智囊』ともに『太平広記』と本文が変わらない。「崔敬女」と「柳氏婢」は、『太平広記鈔』と『智囊』の本文に同じ削除が有る。なお、『情史』にも、「絡秀、崔敬女」（巻2 p. 52）は有り、順番が逆であるが、絡秀と崔敬女という二人の女性を一つにまとめている点は同じ。「崔敬女」は、『情史』も『智囊』と同文、したがって「崔敬女」の本文は、三度使用されたことになる。一方「絡秀」は、『智囊』と『情史』で本文が異なっている（『情史』の「絡秀」の出典は『世説新語』巻19であるが、『智囊』の方は何によるのか、或は独自に改作したものか不明）。これも『智囊』と『情史』の「秀絡」の冒頭の部分を比較のために引用しておく。

智 周顛母李氏，字秀絡，少在室。顛父浚，時爲安東將軍因出獵遇雨，止秀家。

情 周浚作安東時，行獵值暴雨，過如南李氏。

『古今譚概』と『智囊』の間の重見作品で、知られているものは三編¹³⁾。その名称と両書の巻数は、表6に示す通りになっている。

表6

作品名	『古今譚概』	『智囊』
丹客	巻 21 (p. 628)	巻 27 (p. 559)
黄鐵脚	巻 21 (p. 633)	巻 27 (p. 557)
石韃子	巻 22 (p. 670)	巻 28 (p. 572)

このうち、「黄鐵脚」、「石韃子」の本文は、両書でほぼ同じ。一方「丹客」は、『情史』と『智囊』の「崔敬女、絡秀」の場合と似ている。

「丹客」は『古今譚概』・『智囊』ともに二話からなっている。この内の文末の評語と第二話は、両書とも同じ。ところが第一話は、『古今譚概』と『智囊』

で冒頭と最後の二箇所が異なる。この第一話は、『稗史彙編』¹⁴⁾にも「丹客」(巻37 22 a p. 584)の名で収録されており¹⁵⁾、『古今譚概』の本文は『稗史彙編』とほぼ同文である。三本の本文を対照して示すと、まず冒頭は以下のようになる。

稗 客有以丹術行騙局者，假造銀器盛輿從，復典妓爲妾。日飲于西湖，鷓首所羅列器皿，望之，皆朱提白鐵。

譚 客有以丹術行騙局者，假造銀器盛輿從，復典妓爲妾。日飲于西湖，鷓首所羅列器皿，望之，皆朱提白鐵。

智 客有炫丹術者，輿從甚盛，携美妾，日飲于西湖，所羅列器皿，望之，燦然皆黃白。

『智囊』では、冒頭に「行騙局者，假造銀器盛輿從，復典妓爲妾」に該当する文がないが、そのかわりとして話の最後に、「而不知銀器皆偽物，妾則典妓爲騙局也。翁中於貪淫，此客亦黠矣哉」がある。これは「地祇」で、『情史』が文末の「蘆佩，第九也」を削除して冒頭に「行九」を付け加えた例があったのと似ている。「丹客」の結末は各々以下のようにになっている。

稗 客作快快狀去。主君猶以遺爲幸。卒不悟已爲客賣也。嗟嗟，始爲利誘，繼爲色迷，求羨失羸，又奚怪焉。

譚 客作快快狀去。主君猶以得遺爲幸。

智 客作快快狀去。主君猶以得遺爲幸。而不知銀器皆偽物，妾則典妓爲騙局也。翁中於貪淫，此客亦黠矣哉。

思うに『稗史彙編』などのように、はじめに「銀器は偽物，妾とみせたのは妓女を借りてきた」と詐欺の手口を明かしてしまうよりは、最後になって「あれは実は……」と種明しをした方が話としてはおもしろくなるので、このように変更したのであろう。

「丹客」は、冒頭と結末の部分を除けば、その他には三本の間で大きな相違は無い。ただこの三本は相互の間に文字の異同が有るが、次の例のように、『古今譚概』の本文は、『稗史彙編』と『智囊』の中間に位置している。

稗 客入鉛藥，煉踰十日，密約十長髯，突至紿曰：“家羅內艱，盍急往？”

譚 客入鉛藥，煉十餘日，密約一長髯，突至詒曰：“家羅內艱，盍急往？”

智 客入鉛藥，煉十餘日，密約一長髯，突至紿曰：“家羅內艱，求亟返。”

この本文の違い方を見ると、馮は『稗史彙編』の「丹客」に手を加えて、『古今譚概』に収め、更に『古今譚概』の「丹客」に手を加えて、『智囊』の「丹客」としたらしく、『智囊』編纂時に改めて、『稗史彙編』の「丹客」に手を加

えて採録したと言うことではなさそうである。

以上、馮夢龍の著作に重見している作品を比較してみると、彼の編集方法は、一つの書物を編集する度に、その書物にふさわしい内容になるように、新たに作品を選択し加工したのではなく、既成のものを利用し、必要なもののみ新たに付け加えるという、積み重ねあるいは累加方式の編集方法をとっていたことが判る。逆から言えば、馮の著作中に重見する作品でありながら、本文が異なるとすれば、その相違には、何らかの理由があるはずであり、『情史』以下の各書が馮の心中でどのように位置付けられていたのかを知る手がかりとなるであろう。

『太平広記鈔』は、『古今譚概』や『智囊』と違って、『情史』との間に重見する作品が多く、しかも「唐暉」や「干寶」のように異なる本文を持つものも多いので、『太平広記鈔』と『情史』の関係については、後で改めて見てみたい。

3. 出典と出処

前節では、『情史』とそれ以外の馮夢龍の著作との関係を見てきたが、本節では、馮が自著以外の書物をどのように利用しているかを見てみたい。

まず、今回も評語から見て行きたい。他書の評語を利用したとき、「～曰」と引用であることが分かるようになっている箇所もあるが¹⁶⁾、評語の一部として利用し、「～曰」とはしていないこともあるのは、自著の場合と同じであり、「～曰」と引用になっていない評語が、全て馮の新たに付け加えた評語とはかぎらない。

例えば、『情史』の「周六女」(巻2 p. 38)は『夷堅志』¹⁷⁾の「鹽城周氏女」(支志丁 巻九 p. 1036)と同じ話であるが、次のように、『夷堅志』の評語を踏襲している。

夷 向使在劉魚家時已如是，則飢寒畢世矣。

情 周女之慧，有待而聞。向使在劉魚家時已如是，則飢寒畢世矣。

また、「玉堂春」(『情史』巻2 p. 65)は『稗史彙編』(巻49 31 b p. 760)にも採録されているが¹⁸⁾、次のように『情史』の評語中に、『稗史彙編』の記載を踏襲している箇所がある。

稗 好事者撰爲《金釧記》。生爲王翹，妓爲陳林春，商爲周鏗，姦夫爲莫有良，兄爲陳銀，其專折稍有異。

情 生非妓，終將落魄天涯，妓非生，終將含冤地獄。彼此相成，卒爲夫婦。好

事者撰爲《金釧記》。生爲王瑚，妓爲陳林春，商爲周鎧，姦夫爲莫有良。

前節で『情史』の「陳體方」や「地祇」の本文が原典から直接採られたものではなく、『古今譚概』や『智囊』から採られていることを指摘したが、これは出典と出処が異なるという言いかたができると思う。「地祇」を例にとれば、この出典、つまり原典を収めている書物は、『太平広記』であり、この出処、つまり『情史』が直接拠り所としている書物は、『太平広記鈔』である。馮は、自分が手にし得る書物から作品を採録しているのであって、一々原典に当たっているわけではない。しかも明代の編纂物は、馮に限らず採録に当たり、原作の本文に手を加えていることが有るので、出典と出処の区別は重要である。『情史』の場合も、特に本文については、次の「眇娼」の例のような場合、出典と出処を知らないと、馮夢竜の改作していないことまで彼に責任を帰して誤った判断をすることになる。

『情史』巻7の「眇娼」(p.182)は、娼妓の伝記と作者(秦少游)の評論からなり、伝記の最後に「見『淮海集』」と出典を記している。

『淮海集』¹⁹⁾を見ると巻25に「眇倡傳」(「淮眇」)はあり、これと『情史』の「眇娼」(「情眇」)を較べると、「情眇」はだいぶ削除改作されている。これまでと同じ様に、「淮眇」と「情眇」の冒頭の部分を対照させておく。

淮 美倡有眇一目者，貧不能自贖。乃計謀與母西游京師。或止之曰：“倡而眇，何往而不窮？且京師天下之色府也。美眇巧笑，(中略)使若具兩目，猶恐往而不售，況眇一焉。其瘠於溝中必矣。”

情 娼有眇一目者，貧不能自贖。乃計謀與母西游京師。或止之曰：“京師天下之色府也。若目兩，猶恐往而不售，況眇一焉。其瘠於溝中矣。”

この場面は、生活に困って都に出ようとする眇娼に対して、或る人がそれを止めようとして忠告している言葉が大半であるが、「情眇」は「淮眇」の忠告の言葉の途中を27字削り簡略化している。

また、秦少游の評論の部分は以下のようになっている。

淮 贊曰：“前史稱劉建康嗜瘡癩(中略)夫意之所蔽，以惡爲美者多矣。何特眇倡之事哉。”傳曰：“播糠眯目，則天地四方易位。余嘗三復其言而悲之。”

情 秦少游云：夫播糠眯目，則天地四方易位。世之以惡爲美者多矣。何特眇娼之事哉。

「淮眇」では「贊曰」の方にあった「以惡爲美者多矣。何特眇倡之事哉」と言う語句と、「傳曰」の方にある「播糠眯目，則天地四方易位」と言う語句を利

用して、「秦少游云」で始まるひと続きの評語にしている。

ところが、『稗史彙編』を調べてみると、49巻に「眇娼」（18 a p. 754）があり、この『稗史彙編』の「眇娼」（「稗眇」）の本文は「情眇」とほとんど同文。馮が「情眇」で手を加えたと言えるのは「秦少游云」という語句の位置を変えたことくらいである。念のために、「稗眇」の本文の冒頭と、評論の部分を以下に示す。

稗 秦少游云娼有眇一目者，貧不能自贖。乃計謀與母西游京師。或止之曰：
“京師天下之色府也。若目兩，猶恐往而不售，況眇一焉。其瘡於溝中矣。”

稗 夫播糠眯目，則天地四方易位。世之以惡爲美者多矣。何特眇娼之事哉。
更に「稗眇」には、伝記の部分の終りに割注形式で「見『淮海集』」と記されており、「情眇」の出典表記は、これを踏襲しているに過ぎない。

「眇娼」はこの他に『青泥蓮花記』²⁰⁾（「眇倡傳」巻13 p. 13）や『古今譚概』（「眇娼」巻3 p. 92）にも採録されている。『青泥蓮花記』の「眇倡傳」は、『淮海集』の「眇倡傳」と同文。『古今譚概』の「眇娼」（「古眇」）では、評論の部分は採られておらず、伝記の部分も或る人の忠告の言葉は全て削られているなど「情眇」に較べ更に簡略化されている。上に引用した「情眇」の冒頭に該当する部分を、「古眇」では、次のようにしている。

秦少游云：娼有眇一目者，貧不能自贖。乃西游京師。

書き出しに「秦少游云」とあるのを見ると、「古眇」も「稗眇」を参照したらしいが、削除が多すぎ、「稗眇」→「古眇」→「情眇」という経路を考えることはできない。「情眇」は、「古眇」ではなく、「稗眇」の本文を直接利用したと考えるべきである。この「眇娼」も「干寶」や「絡秀」とともに、『情史』が、他の馮の著作の重見作品と一致しない例の一つに数えられる。

また『青泥蓮花記』・『稗史彙編』・『情史』は、皆この「眇娼」のあとに楊維禎の「啞娼」の話が収められている（『稗史彙編』は「眇娼」と「啞娼」の二話を「眇娼」という一つの標題下に収めている）。この「啞娼」も『稗史彙編』と『情史』は、同文。「啞娼」も伝記と評論からなっているので、伝記と評論双方のはじめの部分、三本対照して示す。まず、伝記の冒頭。

青 啞娼者，錢塘娼家女也。生無啼聲，三閏歲不能言。（中略）既教以琵琶箏篋及七盤舞蹈之伎靡不精審。富貴家譚所病而求其所長，（後略）

稗 楊維禎云：錢塘娼家女有美而啞者。教以琵琶箏篋及七盤舞蹈之伎靡不精審。

情 楊維禎云：錢塘娼家女有美而啞者。教以琵琶箏篋及七盤舞蹈之伎靡不精

審。

次に、評論の冒頭。

青 抱遺子曰：“(中略)然娼以啞病，亦以啞遇誠。使啞娼才色，工之以語言文章則所遇未必爾。借遇亦訖，娼求其終身榮者寡矣。(後略)”

稗 使啞娼才色，工之以語言文章則所遇未必爾。借求其終身榮者寡矣。

情 楊維禎曰：“使啞娼才色，工之以語言文章則所遇未必爾。借有之，求其終身榮者寡矣。”

ここまでの「稗眇」と「青眇」の本文の比較を見れば分かるように、「眇娼」と「啞娼」について馮が手を加えた所は、評語の前に評者の名を補い、「眇娼」と言う標題下に隷属していた「啞娼」に標題を与え独立させた程度のこと過ぎない。

刊行年代の順を考えると、『青泥蓮花記』(万曆30年 1602年)が最も早く、次いで『稗史彙編』(万曆38年 1610年)、最後が『情史』になる。思うに、各々独自に編纂された書物同志の間で、宋の秦觀と元の楊維禎と言う時代の異なる人物の文章を、同じ様に並べて採録すると言うことが、偶然起こる可能性は極めて少ないであろうから、「眇娼」と「啞娼」は、『青泥蓮花記』でまず集められ、『稗史彙編』で改作され、『情史』に受け継がれたと考えてよいだろう。

『情史』では、「眇娼」と「啞娼」の例のように、出処となった書物で近傍に在った作品が、『情史』でも近くにあると言うことがときどきある。前節で取り上げた『古今譚概』の「愛痴」と『情史』の「尾生」・「荀奉倩」・「陳體方」、『智囊』の「呉生妓」・「孫太學妓」と『情史』の「東御史妓，呉進士妓」・「婁江妓」などもその例である。

この他に、『情史』の「張小三」(巻1 p.22)と、『稗史彙編』の「義娼傳」(巻49 29 b p.759)、及び「妓女尚義」(巻49 33 a 761)の間にも同様の関係がなりたつ。まず、「張小三」の評語は次のようになっている。あとで参照しやすいように小さく区切り番号を付しておく。

1. 外史氏曰：“世皆云娼無定情，其情僞也，強也(中略)豈憚然全歸如斯人哉。
2. 南京妓劉引兒(中略)而止。
4. 又屠寶石者，(中略)以所寄還之，奉識如故。
5. 此亦張小三之亞也

『稗史彙編』の「義娼傳」は、伝記と「君子曰」ではじまる評論からなっている。「義娼傳」の評論の部分は「外史曰」が「君子曰」になっていることを除

けば、「張小三」の評論の1の文章と同文である。「張小三」の評論のうち2と4の文章は、『稗史彙編』で「義娼傳」の四葉ほどあとにある「妓女尚義」に同じものが見える。その本文を掲げると以下の通り。なお本文を区切り付した番号は、「張小三」の評語の該当するものと対応するようにしてある。

2. 南京妓劉引兒（中略）而止。
3. 京師郭七公子某者，（中略）妓即削髮解足爲尼。
4. 又屠賣石者，（中略）以所寄還之，奉議如故。
6. 世有處富貴之地，淫褻無恥，（中略）然則觀人者，未可以其類也。

「妓女尚義」では2, 3, 4に一人ずつ三人の妓女の話が載せられているが、「張小三」はその内の2, 4を採用し3を削除している。

この「妙娼」・「啞娼」や「張小三」の例は、いわば『情史』の作品配列を通して、馮の利用した書物の配列が透けて見えた例と言えよう。

ただし、このような現象は、この時代必ずしも特異なことではない。たとえば『艶異編』は特にこれが甚だしく、その巻22（夢遊部）の「櫻桃青衣」から「劉道濟」までの六編は、『古今説海』所収の「夢遊録」をそのまま採っているし、巻26（妓女部一）は、『北里誌』をまるごと採ったものに過ぎない。この他にも巻28（妓女部三）は『青樓集』から抜き出したものであるし、巻36（鬼部一）も『太平広記』の巻316（鬼一）から巻334（鬼十九）の間に収録されている作品を順を追って選び出しているに過ぎない。『艶異編』に較べると『青泥蓮花記』は、比較的良心的な編集をしている書物であるが、それでも、巻12には『青樓集』から順に抜き出して並べただけの箇所がある。『情史』も巻22「情外類」だけは『艶異編』巻31の「男寵部」と重なるものが多い。但し『艶異編』は「～部」という部分分けの後には時代順に配列することを基本としているが、『情史』は、各巻の内部も時代順ではなく内容による分類を行っているので配列は異なっている。

出処として利用した書物に於て、近接している複数の作品がそのまま、まとめて採録されているというのは、編集方法としてはいささか安易な方法と言わざるを得ない。しかし、次の例のように、他の書物から採録した文章に対し、馮は『情史』の他の箇所との関係を考慮して調整を行ったり、欠けていると思うものがあれば、他の記載から抜き出してきて補正するなどの例もあり、ただむやみに他人の文章を利用しているのではない。

「于祐」（『情史』巻12 p. 333）の評語は、「紅葉題詩」故事の考証となっているが、これは、龐元英の『談藪』（『古今説海』説略部16所収）の記事にもと

づいている。まず『談藪』の記事を、後で参照しやすいように段落分けし、番号を付けて引用しておく。

1. 唐小説記紅葉事凡四。
2. 一《本事詩》：題況在洛，（後略）又，明皇代，以楊妃虢國寵盛，（後略）
3. 其二《雲溪友義》：廬渥舍人應舉之歲，（後略）
4. 其三《北夢瑣言》言，進士李茵，嘗遊苑中，（後略）
5. 其四《玉溪編事》侯繼圖秋日於大慈寺倚欄，（後略）
6. 惟劉斧《青瑣》中有《御溝流紅葉記》，最爲鄙妄。蓋竊取前說，而易其名爲于祐云。

『談藪』の文章構成は、2, 3, 4, 5 に紅葉に詩を書いたと言う四つの故事の出典とその話の概要があり、6 では、宋代の『青瑣高議』中にある「御溝流紅葉記」はこれらに基づき主人公の名を于祐に変えたものだと議論を展開している。

一方『情史』「于祐」の評語は、以下のようにになっている。なお各段落に付してある番号は、『談藪』の番号と対応するようにしてある。

1. 唐小説記紅葉事有四。
2. 《本事詩》云：顯況在洛，（後略）。一説，明皇時，貴妃寵盛，（後略）
3. 又《雲溪友義》載：宣宗朝，廬渥舍人應舉之歲，（後略）
4. 又《北夢瑣言》所載，與《雲溪友義》同。以爲進士李茵事。
6. 惟劉斧《青瑣》中有《流紅記》，易其人爲于祐，妄也。
7. 又別書載：進士李茵，襄陽人，嘗遊苑中（中略）告辭而去。此説更異。

これを見ると、文章の組立も、文章自体も、『談藪』の記事を『情史』が踏襲していることは明瞭である。なお『情史』では『雲溪友義』の引用に「宣宗朝」と書き加えているが、これは原作にも無いもので、馮が時代をはっきりさせるために付け加えたものである。

『談藪』と『情史』の間の相違は、『情史』が、『談藪』にあった5の部分の削り、7の部分の付加したことである。この5の削除と7の付加は連動している。5の削除は、ここに引用されている「侯繼圖」の話が、『情史』で独立した一編として、既に採用されている（『情史』巻2 p.48）ので、重複を避けるための処置であろう。ただ5を削ったために「記紅葉事有四」という冒頭の記述と合わなくなった。そこで馮は削除した「侯繼圖」のかわりとして、あらたな第四番目の話を追加して辻褄をあわせる必要にせまれ、新たに「又別書載」として7の文章を追加したものと考えられる²¹¹。

ただし、ここで一つ問題になることは、7の部分に引用されているのは、実は4で言及している『北夢瑣言』の記事だということである。馮が編纂した『太平広記鈔』を見ると、「宮人紅葉詩」(巻44 p. 1100)と題して、『北夢瑣言』・『本詩事』の本文を、出典も明記した上で列挙し、『雲溪友議』の文章も付載している。これを見れば、彼はこの李茵の話が『北夢瑣言』のものであることを、知っていたはずである。しかるに、『情史』では「又別書載」と出典を明記できず、しかも4の記事と重なるものを掲載しているのは矛盾している。あるいは、馮は以前『本事詩』等から抄録しておいた、「題紅葉」故事の手控えを手元にもっており、それを参照しながら、『太平広記』や『太平広記鈔』は見ずに、「于祐」の評語を書いたと言うことなのであろうか。

馮が安易に他人の文章を踏襲しているだけではないもう一つの例として、「鶯鶯」(『情史』巻14 p. 407)をあげておく。「鶯鶯」の評語は、『輟耕録』²²⁾の「崔麗人」(巻17 p. 212)記載とよく似ている。

はじめに、「鶯鶯」の評語の該当する箇所を掲げるが、やはり文章をいくつか区切り、番号を付しておく。この文章は、2, 3, 4で三つの墓誌を証拠として引き、「鶯鶯傳」の主人公張生のモデルが作者の元稹自身であることを証明しようとしたもの。なお1の文章で括弧に入れた「稹」の字は、小さい字で割注として挿入されている文字である。

1. 右《會真記》出於元微之(稹)手。
2. 楊阜公見微之所作姨母墓誌云、(中略)保護其家備至。
3. 白樂天作微之母鄭氏誌、(中略)於微之爲中表。
4. 再考微之墓誌。其年甲相合、其爲微之無疑。
5. 因元與張姓同所出、而借言之耳。
6. 傳云、(中略)微之與李十郎一也。特崔不能爲小玉耳。

つぎに「崔麗人」の文章を見てみたい。以下に引くのは、「崔麗人」中の「傳奇辨證」を要約した箇所にあたる。

2. 宋王性之著《傳奇辨證》、按微之作姨母誌云、(中略)保護其家。
3. 白樂天作微之母鄭氏誌、(中略)於微之爲中表也。
4. 樂天作微之墓誌、以大和五年死、至貞元十六年庚辰、正二十二歲。凡此數端、決爲微之無疑。
5. 特託他姓以避耳。事俱在《侯靖錄》中。

「崔麗人」と「鶯鶯」の評語は、文章がよく似ているが、「鶯鶯」の評語の2の文章にある「楊阜公見」と「備至」が「崔麗人」には欠けている。

一方、「侯鯖録」(涵芬樓本『説郛』卷39 1a p. 650) 所引の「傳奇辨證」では次のようになっている。

2. 友人楊阜公嘗得微之所作姨母墓銘，云，(中略) 保護其家備至。
- 4 a. 按樂天作微之墓誌，以大和五年葬，(中略) 至貞元十六年庚辰，正二十二歲。
3. 樂天作微之母鄭夫人誌，(中略) 於微之爲中表也。
- 4 b. 凡此數端，有一於此可驗，決爲微之無疑。
5. 然必更以張生者，豈元與張受性命本同所自出耶。

これを見ると「鶯鶯」と「崔麗人」の4の文章が、「傳奇辨證」では3の文章の前後に分かれていて、『情史』の文章構成は「傳奇辨證」ではなく、「崔麗人」の方に依拠していたことがわかる。しかし、「鶯鶯」に出てくる「楊阜公」と「備至」は、「傳奇辨證」にしか見えないので、馮は「傳奇辨證」と「崔麗人」の両者を参照したうえで、おもに簡略な「崔麗人」の記載によりつつ、「傳奇辨證」によって、必要な箇所を補正していると考えられる。

馮が「傳奇辨證」によって補正した箇所は、「鶯鶯」の本文の方にもある。それは、張生が崔鶯鶯に「春詞」二首を送る場面で、原作である「鶯鶯傳」(『太平広記』卷488 p. 4012) を見ても、「張大喜，立綴《春詞》二首以授之」とあるだけで、「春詞」は掲載されていないが、『情史』の「鶯鶯」では、「傳奇辨證」に「微之古艶春詞云：春來煩到宋家東……」として載せられている詩二首を、この「春詞」として補っている。原作に他から持ってきた文章や語句を書き加えるという操作は、前節の「干寶」の時に一度指摘したが、この「鶯鶯」はそのもう一つの例である。

なお「傳奇辨證」と「崔麗人」は、『艶異編』の巻17に「鶯鶯傳」・「王性之傳奇辨證」，「元微之古艶詩詞」・「鶯鶯傳跋」(「崔麗人」のこと) と言う題でみな収められている。馮が、『艶異編』を参照したことはまちがいないので、「妙娼」や「張小三」の例を考えあわせると、彼が原典でなく『艶異編』所収の「王性之傳奇辨證」・「元微之古艶詩詞」・「鶯鶯傳跋」を利用している可能性は高いだろう。もっとも隆慶年間(1967~1572) に出版された『増編会真記』に「鶯鶯傳」についての資料は、既に集められているので²³⁾、『艶異編』の編集態度から考えると、『艶異編』の編者も自ら資料を集めたのではなく、この『増編会真記』の成果を踏襲しているに過ぎないかも知れない。

最後に、出処を明らかにすることが重要である例をもう一つ挙げておく。

『情史』に「王善聡」の題で収められている作品は、なぜか『情史』以外で

は主人公の名がどれも王善聡ではなく黄善聡になっているが、知られている限りでも、『情史』や『智囊』など九種類の書物に、載せられている²⁴⁾。ところが、この「黄善聡」は、同じ馮の著作でありながら、『智囊』と『情史』で出処が異なっている。これも『情史』と他の馮の著作に重見する作品の本文が、一致しない一つの例である。

この話は本文の踏襲改編が繰り返されたため、本文の異同は多いが、大略三類に分類できる。

一つは、『双槐歲鈔』²⁵⁾と『琅邪代醉編』²⁶⁾(A類)。「琅邪代醉編」は出典こそ『双槐歲鈔』となっているが、実際には削除により簡略化されたものである。次にあげるのは、両書の冒頭の部分。

雙 南京淮清橋女子黃善聰者，年十二，失母，有姊已嫁人矣。父販綫香爲業，往來廬鳳間，憐其幼且無母，又不可寄食於姊。乃令爲男子飾，携之旅游者數年。

琅 金陵女子黃善聰者年十二，失母，父販爲業乃令爲男飾，携之旅游者數年。

二は、『智囊』、『留青日札』²⁷⁾、『焦氏筆乘』²⁸⁾、『五雜俎』²⁹⁾及び林近陽編の『燕居筆記』³⁰⁾(B類)。「智囊」では、「黄善聡」は「木蘭等」という三話からなる作品の第三話で、残りの第一話は木蘭、第二話は韓氏である。このうちの第二、三話が、『留青日札』と同文。刊行された年代で言えば、B類中では『留青日札』が最も早い。次は、やはり両書の冒頭の部分。

智 黃善聰，應天懷清橋民家女，年十二，失母，其姊已適人。獨父業販綫香，憐善聰孤幼，無所養，乃令爲男子裝飾，携之旅游廬鳳間者數年。

留 黃善聰，應天淮清橋民家女，年十二，失母，其姊已適人。獨父業販綫香，憐善聰孤幼，無所養，乃令爲男子裝飾，携之旅游廬鳳間者數年。

『焦氏筆乘』と『燕居筆記』は、『留青日札』の本文を簡略にしたもので、本文がほぼ同じ。やはりその冒頭。

焦 黃善聰，金陵淮清橋民家女，年十二，失母，有姊已適人。父販綫香爲活，憐善聰孤幼，無依，詭爲男子裝，携之旅廬鳳間。

燕 黃善聰，金陵淮清橋民家女，年十二，失母，有姊已適人。父販綫香爲活，憐善聰孤幼，無依，詭爲男子裝，携之旅廬鳳間。

『五雜俎』は、話の概要程度のものであるが、「此二事《焦氏筆乘》所載」と言っている。やはり冒頭の部分を引用しておく。

五 金陵黃善聰，年十二，失母。父以販香爲業，恐其無依，詭爲男子裝，携之旅廬鳳間。

三が、『情史』の「王善聰」で、他に『稗史彙編』の本文がこれに近い（C類）。他と同様に両書の冒頭の部分を挙げておく。

情 王善聰者、金陵城中女子也。年十二、喪母、姊亦嫁。父某向綫香販江北諸郡。因念幼而孤、僞飾爲男、挈之以行。

稗 黃善聰、金陵女也。年十二、喪母、姊已嫁。父嘗挾綫香販江北。因念幼孤、假裝爲男、挈之以往。

ここであらためて、九冊の書名と、収録している巻数を示せば以下の表のようになる。

表7

A類

書名	題名	巻数
『双槐歲鈔』	「木蘭復見」(「双黄」)	巻 10 (p. 175)
『琅邪代醉編』	「男飾」(「琅黄」)	巻 19 (13 a)

B類

書名	題名	巻数
『智囊』	「木蘭等」(「智黄」)	巻 26 (p. 540)
『留青日札』	「復見兩木蘭」(「留黄」)	巻 20 (3 a)
『焦氏筆乘』	「我朝兩木蘭」	巻 3 (p. 86)
『五雜俎』	(標題無し)	巻 8 (1 b)
『燕居筆記』	「貞女」	巻 10 (p. 665)

C類

書名	題名	巻数
『情史』	「王善聰」(「情黄」)	巻 2 (p. 43)
『稗史彙編』	「仮男張勝」(「稗黄」)	巻48(9 a p. 730)

このらの三類の間の相違のうち重要なものは、台詞の相違である。C類は、二箇所てA・B類に比べると台詞が詳しくなっているが、その台詞は、「黄善聰」を素材として創作された『古今小説』³¹⁾巻28の「李秀卿義結黄貞女」(「古黄」)のものと同様である。

「古黄」の台詞との間に類似を指摘できる一つめは、主人公黄善聰が、男装

のまま姉の家を尋ねたときの二人の会話。『琅邪代辭編』は「双黄」と、『留青日札』・『焦氏筆乘』・『五雜俎』・『燕居筆記』は「智黄」と、ほぼ同文なので、これ以後は省略して「双黄」, 「智黄」, 「情黄」, 「稗黄」四種類の本文を掲げて対照することにする。

雙 姊謂：“我本無弟，惟小妹隨父在外。爾胡爲來？”乃笑曰：“我即善聰也。”泣語之故。

智 姊言：“我初無弟，安得來此？”善聰乃笑曰：“弟即善聰也。”泣語其故。

情 姊不之識，且曰：“我上無兄，下無弟。止有妹耳。我父挈往他所買販。數年，音問不通，存亡未審。”善聰哭曰：“我即是也。父死，孤貧不能歸，不得已與鄉人李英合夥營度。今始歸拜姊耳。”

稗 姊不識，且曰：“吾昔無兄弟。止有姊耳。我父挈往他所買販。數年來，音問不通，存亡未審。”聰哭曰：“吾即汝妹善聰也。父死，孤貧不能歸，不得已合郡人李英爲夥營生度日。今始歸拜姊耳。”

「古黄」の該当箇所を目を向けてみると、「情黄」・「稗黄」では一つであった黄善聰の台詞が二つに分けられているものの、二人のはなしている内容は、「稗黄」・「情黄」と大筋において変わっておらず、使用している語彙にも同じものが見られる。

古 姐姐道：“思量甚麼？前九年我還記得。我爹爹並沒兒子，止生下我姊妹二人。我妹子小名善聰，九年前爹爹帶往江北販香，一去不回。至今音問不通，未審死活存亡。你是何處光棍，却來冒認別人做姐姐？”張勝道：“你要問善聰妹子，我即是也。”（中略）張勝道：“（中略）你妹子雖然殯殮，却恨孤貧，不能扶柩而歸。有個同鄉人李秀卿，志誠君子，你妹子萬不得已，只得與他八拜爲交，合夥營生。淹留江北，不覺又六、七年，今歲始辦歸計。適纔到此，便來拜見姐姐，別無他故。”

「稗黄」・「情黄」の台詞が詳しくなっているもう一箇所は、この話の最後、黄善聰が男装の間一緒に商売をしていた男性李秀卿と結婚するまでの顛末を述べた一節。

雙 乃求婚焉。善聰執不從，曰：“此身若竟歸英，人其謂我何。”所親與鄰里交勸，則涕泣語之。事聞三廠，勤爲夫婦，且其奩具。成婚之日，有人歌之者，以爲木蘭復見於今日云。

智 即爲之求婚。善聰不從，曰：“妾竟歸英，保人無疑乎。”交親鄰里來勸，則涕淚橫流，所執益堅。衆口喧傳以爲奇事，廠衛聞之，乃助其聘禮，判爲夫婦。

情 旋遣媒往。聰堅拒之曰：“嫌疑之際，不可不謹。今日若與配合，無私有私，數年貞節，付之逝水。不畏嘲笑乎。”英服其有守，相慕益切。往復再四，終不聽。事聞三廠，中官嘉其義，逼令成婚，且贈貲焉。聰不敢違，遂爲夫婦。

稗 乃遣媒求配。聰堅拒曰：“吾向與英同臥起者數年，今若諧婚，則終身不得明前節矣。”所親交勸之，聰志益堅。事聞三廠，中官逼令就婚，且以貲妝相贈。聰始不敢違，遂爲夫婦。

「情黃」に見える王善聰の台詞「嫌疑之際，不可不謹。今日若與配合，無私有私，數年貞節，付之逝水。不畏嘲笑乎」は、「双黃」や「留黃」ばかりでなく、「稗黃」とも異なる「情黃」独自のものである。注目すべきことに、「古黃」の結末部分にもほぼ同じ台詞が見えている。「古黃」は、該当する一節を全て引用するとあまりに長くなりすぎるので，黄善聰の台詞とその前後のみを引いておく。

古 乃央媒嫗去張家求親設合。張二哥夫婦，到也欣然。無奈善聰立意不肯，道：“嫌疑之際，不可不謹。今日若與配合無私有私，把七年貞節，一旦付之東流，豈不惹人嘲笑？”媒嫗與姐姐兩口交勸，只是不允。那邊李秀卿執意定要娶善聰爲妻。每日纏着媒嫗，要他奔走傳話。三回五轉，徒惹得善聰焦燥，並不見鬆了半分口氣。

この二箇所「古黃」と「情黃」の台詞の類似は、もし「稗黃」が存在しなければ、『情史』が『古今小説』よりも後に刊行されていること、『古今小説』も『情史』も馮の編纂した書物であることから、彼が『古今小説』を編纂した後、『情史』を編む際に「古黃」の台詞を参照して、二箇所の台詞を書き換えたと単純に説明することができたであろう。しかし「稗黃」と「古黃」の間にも一箇所ではあるが、台詞の類似が見いだせる。したがって考えられる「稗黃」・「古黃」・「情黃」の間の関係としては、次の三つの可能性が挙げられよう。

1. 「古黃」が始めに成立し、「稗黃」は「古黃」の台詞のうち一箇所のみ参照し、「情黃」が更にもう一箇所を参照した。
2. 「古黃」は、「稗黃」に基づき創作された。
3. 「古黃」がまずはじめに成立し、次に「稗黃」はこれを参照して台詞を書き換えた。最後に馮が「古黃」を改作し、「情黃」もこれを踏襲した。

どれが正しいかは、簡単に決めることはできないが、どの可能性を選んでみても「情黃」に白話小説の「古黃」を参照した書き換えがあるということは間違

いがない。

一方『情史』とさほど離れていない時期、しかも『古今小説』より後に編纂された『智囊』には、このような書換えが無く、しかも「智黄」は「情黄」と出処を異にしている。これは、馮の心中で、例えば『智囊』に標準的な本文を、『情史』には白話小説に近い新しい本文をとるように、書物の性格付けが、異なっていたことの反映しているものと考えられる。

注

- 1) 初刊本の刊年は不明であるが、再版本に庚申年(泰昌元年)の序が有る。『古今譚概』(海峽文艺出版社 1985) 前言 p. 7。
- 2) 『九篇集』(中国社会科学出版社 1984)「負情儂傳」に引く『情鐘』の評語(同書 p. 118)によれば、「杜十娘」(『情史』巻14)の評語は、『情鐘』の評語を引用したものである。『情鐘』の序文についての記載は、Patrick Hanan, *The Chinese Vernacular Story* (Cambridge, Mass., Harvard Univ. Press, 1981) p. 227n. 85参照。
- 3) 『情史』のテキストとしては、明刊本によって校訂したという『情史』(春风文艺出版社 1986)を使用し、他に芥子園本によるという岳麓出版社本、天一出版社の影印本を参照した。以下に『情史』を引用するときは、春风文艺出版社本により巻数と頁数を示す。
- 4) 陆树仓『冯梦龙研究』(复旦大学出版社 1987) p. 149。
- 5) テキストは、『古今譚概』(海峽文艺出版社 1985)。
- 6) 海峽文艺出版社本『古今譚概』p. 91。
- 7) 『蘇談』は『續説郢』(『説郢三種』上海古籍出版社 1988) 所収のものを使用。
- 8) テキストは『太平广记钞』(中州书画社 1983)。
- 9) テキストは、『太平广记』(中华书局 1961 新一版)。
- 10) テキストは、『智囊全集』(江苏古籍出版社 1986)。
- 11) テキストは、『古今说海』(上海文艺出版社 1989)。
- 12) テキストは、『搜神后记』(中华书局 1981)。
- 13) 海峽文艺出版社本『古今譚概』按語の指摘による。
- 14) テキストは、万曆 38 年刻本を影印したという『稗史彙編』(新興書局 刊年不記)を使用した。以下に引用するときは、この新興書局本によって巻数と葉数(表を a, 裏を b として表記)及び頁数を示す。
- 15) 小川陽一編著『三言二拍本事論考集成』(新典社 1981) p. 253。
- 16) 例えば、『情史』中に「長卿氏曰」とあるのは、呉震元『奇女子伝』の評語から採ったものである。陳萬益「馮夢龍『情教説』試論」(『晚明小品與明季文人生活』大安出版社 1988 p. 174)
- 17) テキストは、『夷堅志』(中华书局 1981)。
- 18) 小川陽一編著『三言二拍本事論考集成』(新典社 1981) p. 135。
- 19) テキストは、『淮海集』(『四部叢刊』商務印書館)。
- 20) テキストは、『青泥蓮花記』(廣文書局 1980)。
- 21) 参考までに、「題紅葉」故事の出典を挙げておく。『談薈』の記事に「本事詩」とあ

るのは、「顧況」(『太平広記』巻198 p.1486),『雲溪友議』とあるのは、「盧渥」(『太平広記』巻198 p.1486),『北夢瑣言』とあるのは「李鹵」(『太平広記』巻354 p.2807),『玉溪編事』とあるのは、「侯繼圖」(『太平広記』巻160 p.1153),「一説云」としてひかれているものは、『雲溪友議』に収められている(涵芬樓本『説郛』巻5 38b p.109)。

- 22) テキストは、『南村辮耕録』(中华书局 1959)。
- 23) 蔣星煜『明刊本西廂記研究』(中国戏剧出版社 1982) p.82。
- 24) 「黄善聡」の話がどの書物に収められているかについては、小川陽一編著『三言二拍本事論考集成』p.70に最近の成果が集成されている。
- 25) テキストは『雙槐歲鈔』(『叢書集成』商務印書館)。
- 26) テキストは、『琅邪代醉編』(汲古書院 1973)。
- 27) テキストは、『留青日札』(上海古籍出版社 1985)。
- 28) テキストは、『焦氏筆乘』(上海古籍出版社 1986)。
- 29) テキストは、『五雜俎』(汲古書院 1974)。
- 30) テキストは、『燕居筆記』(上海古籍出版社 刊年不記)。
- 31) テキストは、『古今小説』(世界書局 刊年不記)。